

[Practical Report]

Student difficulties and how to overcome them in hybrid integrated nursing practice

Akiko Matsumoto*, Ayumi Nishigami*, Masayo Nagai*, Yuka Miyaoka*
Yuting Jia**, Yuta Okuda*** and Reiko Nakano*

* Aino University

** Former Aino University

*** Kyoto Prefectural University of Medicine Graduated School of Nursing for Health Care Science

Abstract

Objective: To clarify student difficulties and how to overcome them in hybrid integrated nursing practice that uses both online tools and face-to-face. Method: Qualitatively inductively report on the challenges of “what was difficult in achieving the purpose of the training and how to overcome it” for 94 fourth-year students who conducted the training in 2020 analyzed. Results: Two categories of student difficulties were identified: [difficulties derived from practical training] and [difficulties derived from student qualities]. In terms of content, more difficulties were found to be derived from integrative nursing practice than from the hybrid type. Two categories of methods for overcoming difficulties were identified: [methods for overcoming difficulties in practice] and [methods for overcoming difficulties in learning]. Discussion: Although we were able to learn about the goals to be achieved, it was suggested that there is a need to introduce education that incorporates the reality of clinical practice with an eye to after the students enter the workforce.

Key Words : hybrid nursing practice, integrated nursing practice, covid-19

4年次を対象としたハイブリッド型統合看護学実習で 学生が感じた困難と克服方法

松本 晃子*, 西上 あゆみ*, 長井 雅代*, 宮岡 裕香*
賈 玉婷**, 奥田 裕太***, 中野 玲子*

【要旨】

目的：オンラインツールと対面型を併用したハイブリッド型統合看護学実習における学生の困難とその克服方法について明らかにする。方法：2020年度実習を行った4年生94名を対象とし、「実習の目的を達成するにあたり、困難であったこととそれをどのように克服したか」についての課題レポートを質的帰納的に分析した。結果：同意の得られた11名すべてを分析対象とした（回収率11.7%）。学生の困難として、【実習に由来する困難】と【学生の資質に由来する困難】の2つのカテゴリーが明らかとなった。内容はハイブリッド型に由来する困難より、統合看護学実習に由来するものが多く見られた。克服方法として【実習に対する克服方法】と【学習に対する克服方法】の2つのカテゴリーが明らかとなった。考察：達成すべき目標については学ぶことができたが、学生の入職後を見据えた臨床現場の実際を取り入れた教育の導入の必要性が示唆された。

キーワード：ハイブリッド型実習, 統合看護学実習, covid-19

I. はじめに

2020年2月頃からの新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴い、外出自粛などの行動制限や、感染予防対策のガイドライン等が導入され、人々の生活は大きく変化した。感染拡大により病院などの医療機関には多大な負担がかけられ、未だ終息の見えない事態が続いている。

看護基礎教育においても、これらの影響を多大に受けている状況である。とくに臨地実習に関しては、医療提供体制の維持及び感染予防の観点から、病院において学生の受け入れが困難である事態が生じ、学生の実践活動の場が制限されている。文科省（2020）は臨

地実習において、最終学年においては学生が既に臨地実習における学修を経験していることに鑑み、当該教育内容における実習目標を踏まえて、当該事例を用いた看護過程の展開を通して学習することとして差し支えないとしている。さらに、この場合に用いる事例は、模擬患者や紙上事例等が考えられるとしており、藍野大学（以下、本学とする）においても2020年7月、紙上事例を用いた統合看護学実習（以下、本実習とする）が行われることとなった。本学の看護学科において、コロナ禍における初めての学内実習であった。本実習時は、通学に関しても感染拡大予防の観点から週1日のみと制限があったため、大学内のみでの実習ではなくオンラインでの講義や学生、教員との連携を含

* 藍野大学

** 元藍野大学

*** 京都府立医科大学大学院

めたハイブリッドな実習となった。既にいくつかの教育機関においても、オンラインによる講義や、病院等の医療施設と大学をオンライン接続した実習など、様々な取り組みが行われていることが報告されている(厚生労働省, 2020)。未だ終息の見えない感染拡大の状況によって、看護基礎教育における臨地実習自体の運営方法が多様化してきているといえる。

しかし、近年看護学生の学力や社会性の低下などが問題視されている中で、実践の場での学修である臨地実習の運営が変化していくことは、看護基礎教育の質に影響を及ぼす可能性もある。現在行われている新たな教育方法を模索することは、型にはまった教育体制を見直す機会でもあると捉えられる。そこで本研究では、学生がハイブリッド型実習で感じた困難や、それに対する行動などの分析を行い、学生の学びを深めるための支援に対する示唆を得たいと考えた。

II. 目 的

オンラインツールと対面型を併用したハイブリッド型統合看護学実習における学生の困難と、その克服方法について明らかにする。

III. 研究 方 法

1. 研究デザイン

質的帰納的研究

2. 調査対象

2020年度A大学にて統合看護学実習を行った4年生94名中、同意を得られた11名

3. 調査期間

2020年8月～2021年3月31日

4. 調査内容

実習の課題の1つである「実習の目的を達成するにあたり、困難であったこととそれをどのように克服したか」というテーマの1000字程度のレポート(以下、課題レポートとする)について内容を分析した。

5. 分析方法

学生が記述した困難と克服方法についての文章を精読し、コード化を行い、類似性や創意性に着目しながら内容分析法により分類・整理、要約をしてカテゴ

リー化を行った。また、コード化、カテゴリー化の段階においては7名の研究者間で提出されたレポートを熟読し、目的に該当する内容の抽出と確認、修正を繰り返すを行い、研究者間での一致度により信頼性および妥当性の確保に努めた。

6. データの収集方法

課題レポートは指定の様式にワードで作成させていた。実習終了後、調査対象に対し、提出したレポートを無記名の状態にして印刷し、大学内に設置した回収箱に再度提出を依頼した。

7. 倫理的配慮

本研究は藍野大学研究倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号:Aino-2020-007)。課題レポートは無記名で提出するため個人が特定されることはないこと、研究の趣旨、研究目的、内容、研究協力の自由と協力の有無による不利益は一切ないこと、データの取り扱いによる個人情報の保護等を文書と口頭で説明し、本研究への協力を得た。

IV. 実 習 の 概 要

統合看護学実習は、厚生労働省(2019)により、看護師教育カリキュラムにおける看護の統合と実践の中に多職種連携や多重課題の修得等を目的に位置付けられている。本学における統合看護学実習は4年次を対象とし、通常であれば連続2週間、大学の系列病院にて複数の患者を受け持ち看護過程の展開を行う。また、その間に実習病棟の師長等による管理業務や、理学療法士や栄養課など他職種との連携を見学させていただくこととしている。

しかし、本実習が行われた2020年度、コロナ禍において初めての緊急事態宣言が4月に発出された。政府は当時、人との接触の8割減を目標としており、教育現場では初めて登学制限が出され、学生は自宅学習となりオンデマンドでの講義が開始されるなど、学習方法が一変し混乱が生じていた。これらの導入や感染拡大に伴い、本学においては4月の開講が約1ヵ月遅れることとなった。さらに、ほとんどの医療機関は臨地実習受け入れを中止し、本実習も同様に中止されることが決定した。さらに、本実習の対象となる4年次は、高校教員免許修得のための教育実習や保健師免許修得のための実習が控えており、本実習は7月中に終了する必要があった。このような混乱した条件下で本

学は、登学制限がある中での初めての学内実習である本実習を行うこととなった。

実習スケジュールは、表1のとおり、本来である連続2週間の実習期間の代替として週2日間、4週間にわたり対面とオンラインを混合させたハイブリッド型の実習形態とした。実習期間中は、自宅学習日や登校日を問わず教員や学生とのやり取りにクラウド型教育支援システム manaba を使用した。教員からの伝達事項やグループ間でのやり取りが必要な場合等は

manaba にアクセスし、チャットを通して情報交換することとした。また、実習内容だけではなく、学生の体温など体調管理に関しても毎日 manaba を通して報告させた。登校日には、学内において密を避け、手指消毒や換気などを常に行えるよう定められた感染対策を行った。

学生には全学生共通で2名の紙面上患者を提示し、2名分の看護過程の展開をさせた。実習は週2日間、4週間であったが紙面上患者の経過は2週間であった

表1 実習概要

目的	1. 医療チームの一員としての役割を理解し、看護をマネジメントするために必要な基礎的知識・技術を学ぶ		
	2. 医療における安全管理・感染防御の必要性を理解し、組織の考え方や対策についての基礎的能力を養う		
目標	3. 既習の知識・技術を統合し、より実践的な看護実践能力を養う		
	4. 他職種との連携・協働を理解することができる		
実習スケジュール	実際の日付	仮定実習日	実習内容
	7月1日(水)	6月29日(月)	【学内】 事前学習の確認 受け持ち患者2名の情報提示・情報収集 カンファレンス
	7月3日(金)	6月30日(火)	【自宅】 午前：zoom で出欠確認・本日の患者情報の資料から情報収集 記録作成 午後：zoom を使用して講義(目標2) zoom を使用したグループカンファレンス
	7月8日(水)	7月1日(水)	【学内】 立案したケアプランに基づいた患者への援助(学内演習) 記録作成 カンファレンス
	7月10日(金)	7月2日(木)	【自宅】 午前：zoom で出欠確認・本日の患者情報の資料から情報収集 記録作成 午後：zoom を使用して講義(目標1) zoom を使用したグループカンファレンス
	7月15日(水)	7月3日(金)	【学内】 立案したケアプランに基づいた患者への援助(学内演習) 記録作成 カンファレンス
	7月17日(金)	7月6日(月)	【自宅】 午前：zoom で出欠確認・本日の患者情報の資料から情報収集 記録作成 午後：zoom を使用して講義(目標4) zoom を使用したグループカンファレンス
	7月22日(水)	7月7日(火)	【学内】 立案したケアプランに基づいた患者への援助(学内演習) 記録作成 カンファレンス
	7月24日(金)	7月8日(水)	【自宅】 午前：zoom で出欠確認・本日の患者情報の資料から情報収集 記録作成 午後：zoom を使用して講義(目標1) zoom を使用したグループカンファレンス
	7月29日(水)		【学内】 担当教員からの指導・総括 記録提出

ため、仮定実習日を設定した。実習初日に基本的な患者情報を提示し、2日目以降も登校日と自宅学習日に毎朝、経過表や看護記録をカルテに近い形で作成した患者のその日の情報を manaba に掲載し更新していった。看護過程の展開をできるだけ臨地実習に近い形で、タイムリーに考察できるよう配慮した。

登校日にはグループごとに本学の基礎看護学演習室にて人形（京都科学 万能型看護実習モデル「八重」または「さくら」）を患者に見立て、各学生が立案したケアプランを実施させた。グループは通常の実習通り1グループあたり5～6名の学生とし、それぞれのグループに主担当の教員1名と副担当の教員1名を配置した。演習時などの指導は主に主担当が担当するが、学内業務と並行しているため、主担当が不在の際に副担当が代わりに行った。

また、オンラインツールを用いた自宅学習では主に zoom を使用し、目標 1, 2, 4 に関する講義と、それに関するレポートを作成させた。さらに、zoom を使用しグループでのカンファレンスを毎回 30 分程度行った。学習に関しても開始時間に zoom を使用してオンライン上でグループが集合して確認を行い、講義時とカンファレンス時と合わせて常に実習時間内は実習に参加しているか確認した。

V. 結 果

11 名からレポートの提出があった（回収率 11.7%）。学生の困難としては 38 のコードから 11 のサブカテゴリーが抽出され、2つのカテゴリーに分類された。また、克服方法としては、79 のコードから 17 のサブカテゴリーが抽出され、2つのカテゴリーに分類された（表 2、表 3）。以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを [], コードを「 」で記載する。

1. 学生の困難

【実習に由来する困難】としては6つのサブカテゴリーで構成された。[マネジメント概念の理解]では「看護をマネジメントするために必要な基礎的知識・技術を学ぶということ」など3つ、[安全管理・感染予防]では「清潔と不潔の区別」など2つのコードで構成された。さらに「他職種連携」では「現場の看護師（リーダー）が行う業務内容や他職種連携・他職種協働の場面を目で見ることができない」など2つで構成された。これらは理学療法士や薬剤師、医師など他の職種との調整を示していた。これらは実習目標 1, 2, 4 に関連しており、実習では主に講義を通して理解する内容であった。

表 2 学生の困難

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード	コード数
実習に由来する困難	マネジメント概念の理解	何時に、誰が、どの患者さんに、どの援助を行うかまでを考えないといけない 看護をマネジメントするために必要な基礎的知識・技術を学ぶ	3
	安全管理・感染予防	2の目的を達成すること 清潔と不潔の区別	2
	他職種連携	他職種との連携について深く考えられなかった 現場の看護師（リーダー）が行う業務内容や他職種連携・他職種協働の場面を目で見ることが出来ない	2
	2人受け持ち・多重課題	2人受け持ちによるタイムマネジメント 2名の受け持ち患者に対するケアの実施を領域実習（受け持ち患者一名）のように分けて考えてしまう	5
	優先順位	二人を受け持つ中で患者さんにとって何が一番に必要なかを決めていくこと 看護問題の優先順位と自分の行動	5
	患者が実在しない	人形を用いての演習で点滴筒がなくつい忘れてしまいそうになる 発言のトーン、様子が不明である	7
学生の資質に由来する困難	修正をすぐ行う	計画の修正をすぐに行わなければならなかった	1
	書けない	A氏優先の行動計画にしなければいけないがうまく書くことができなかった	1
	情報提供	退院後の生活に向けて他職種と情報共有をしなければならぬが自ら率先して情報共有することが困難であった 退院後や在宅での生活を考察したうえでの情報提供を考察するのが困難であった	2
	想像できない	マネジメントをするということが身近なことではなく想像する 講義だけでは、抽象的なことも多く、理解しにくい部分もあった	2
	自分の考えが優先	私の理想論を患者に押し付けていた 自身の考えで患者を指導しようとしていた	3
	知識不足	自分だけで看護ケアを考察し実施する 行動計画もなぜこの型が優先なのかという根拠もはっきりこうだからと言えず	5

表3 学生の克服方法

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード	コード数
実習に対する克服方法	タイムマネジメント	看護ケアの時間などタイムマネジメントに意識して実習に臨んだ 看護に対する視野を広げることで、タイムマネジメントにも関連させていく	8
	自分のタイミングでしたい	一度立ち止まって 患者の状態に応じてその都度考える	6
	優先順位を考える	A氏がなぜ優先なのか考え その時ごとに対応し優先順位を変更させていく	7
	全体像を捉える	身体面・精神面、社会面と多方面からみて考え援助を行う マクロの視点にて視野の幅を広げて全体を俯瞰的に見ていく	5
	安全性を考える	それぞれの患者の安全性を考え 生命に関わることは何か、安全・安楽な援助を行うという視点をもち	4
	カンファレンスを含め、他学生との交流	カンファレンス時にメンバーと相互に意見を出し合い 仲間の意見を聞く	12
	実践するように意識する	日ごろから安全管理や感染防御の必要性を意識して患者に提供する それぞれの領域を統合し、それらを看護実践していけるよう考えて行動することを意識した	5
	予想する	何が考えられるのかを想像する、注意する、観察する 患者さんの中で何かが起きているサインかもしれないと思う	7
	患者とのかかわり	患者状態や面会状況に応じて訪室する時間を変更し、家族の情報も得られるよう調整する 個々のかかわりを大切にしなければならない	3
学習に対する克服方法	先生からの指導を活かす	担当教員に経験談や助言を頂く 教員に指導をいただき	5
	講義を活かす	講義内容の復習 実際の経験を交えた講義	3
	勉強しておく	どのような状態になっても対応できるように勉強しておく	1
	段階的	一度に整理して理解できなかった目標を段階的に理解する	1
	課題に取り組む	レポート課題にとり組む 必要のあるケアがあるものを考える	2
	情報収集から考える	看護師がケアを実施することで得られる客観的な情報も収集 積極的に情報共有をしなければならない	7
	インターネット	インターネットで多くの病院が挙げている管理職の業務や多職種連携の実際(プレ・検討会)を視聴する	1
	実習期間延長を活かす	実習期間の延長を疑問や知識不足を解消するための学習時間として活用する	1

「2人受け持ち・多重課題」では「2人受け持ちによるタイムマネジメント」など5つ、「優先順位」では「二人を受け持つ中で患者さんにとって何が一番に必要であるかを決めていくこと」など5つのコードで構成された。これは、実習目標3に関連しており、実際に紙面上患者を用いて日々看護を展開していくことで達成していく内容であった。複数患者を受け持つことは本実習が初めてであり、多くのコードが抽出されていた。

「患者が実在しない」では「発言のトーン、様子が不明である」など7つのコードで構成された。これは特定の实習目標との関連はなく、オンライン実習や紙面上患者であったことに対する困難であった。

【学生の資質に由来する困難】としては6つのサブカテゴリーで構成された。「修正をすぐ行う」では「計画の修正をすぐに行わなければならない」と

いうコードから構成された。「書けない」では「A氏優先の行動計画にしなければいけないがうまく書くことができなかった」というコードから構成された。これらのような、タイムリーに優先順位を考慮しながら記録を仕上げる必要があることに、学生個人の学力や情報処理能力などが影響したサブカテゴリーが抽出されていた。

「情報提供」では「退院後や在宅での生活を考察したうえで情報提供を考察するのが困難であった」など2つのコードから構成された。「想像できない」では「マネジメントをするということが身近なことではなく想像すること」など2つのコードから構成された。「自分の考えが優先」では「私の理想論を患者に押し付けていた」など3つのコードから構成された。これらのような、オンラインを使用したり、紙面上患者であったことから、学生自身が経験からだけでは状況を

イメージできないことによるサブカテゴリーが抽出されていた。

【知識不足】では「自分だけで看護ケアを考察し実施すること」など5つのコードから構成されており、実習メンバーや教員と話し合ったり助言を受ける機会が少なく、学生自身の知識の乏しさから自信を持ちにくい状態であったことが示された内容であった。

2. 克服方法

【実習に対する克服方法】としては9つのサブカテゴリーで構成された。【タイムマネジメント】では「看護ケアの時間などタイムマネジメントを意識して実習に臨んだ」など8つのコードから構成された。【自分のタイミングでしたい】では「一度立ち止まって」など6つのコードから構成された。【優先順位を考える】では「その時ごとに対応し優先順位を変更させていくこと」など7つのコードから構成された。これらは目標3を意識した克服方法であり、多重課題に関して取り組んだコードが挙げられていた。

【全体像を捉える】では「身体面・精神面・社会面と多方面からみて考え援助を行う」など5つのコードから構成された。このサブカテゴリーに関しても目標3に関連したものであったが、多重課題ではなく、患者を全人的に捉える視点から挙げられた内容であった。

【安全性を考える】では「生命に関わることは何か、安全・安楽な援助を行うという視点を持ち」など4つのコードから構成された。これは実習目標2に関連した克服方法であり、看護における安全管理について組織管理の視点だけでなく、事例に対しても意識しているコードが挙げられていた。

【カンファレンスを含め、他学生との交流】では「仲間の意見を聞く」などの12個のコードから構成された。これは特定の目標を意識したものではなく、オンラインツールを使用したカンファレンスなど、他学生とのやりとりを通して不安を克服しようとした内容であった。

【実践するように意識する】では「日ごろから安全管理や感染防御の必要性を意識して患者に提供する」など5つのコードから構成された。【予想する】では「何が考えられるのかを想像する、注意する、観察する」など7つのコードから構成された。【患者とのかかわり】では「個々のかかわりを大切にしなければならない」など3つのコードから構成された。これらも特定の目標を意識したものではないが、学生自身で克服しようとする取り組み内容であった。患者が実在せず、

紙面上患者を用いたことによって、患者との関係性や看護実践を意識的に行おうとしていた内容であった。

【学習に対する克服方法】としては8つのサブカテゴリーで構成された。【先生からの指導を活かす】では「担当教員に経験談や助言をいただく」など5つのコードから構成された。【講義を活かす】では「講義内容の復習」など3つのコードから構成された。学習不足であることに対して、外的な支援を活かした内容であった。

【勉強しておく】では「どのような状態になっても対応できるように勉強しておく」という1つのコード、【段階的】では「一度に整理して理解できなかった目標を段階的に理解する」という1つのコードからそれぞれ構成された。【課題に取り組む】では「レポート課題に取り組む」など2つのコードから構成された。【情報収集から考える】では「看護師がケアを実施することで得られる客観的な情報も収集」など7つのコードから構成されていた。これらは学生が与えられた情報を活かしながら、学生自身で学習を効果的にしようとしている姿勢が表れていた。

【インターネット】では「インターネットで多くの病院が挙げている管理職の業務や多職種連携の実際（プレ・検討会）を視聴する」という1つのコード、【実習期間延長を活かす】では「実習期間の延長を疑問や知識不足を解消するための学習時間として活用する」という1つのコードから構成された。これらは本実習の特徴であるオンラインツールを用いたことと、週に2日間、4週間という実習期間が通常より長期間となったことを活かした内容であった。

VI. 考 察

看護基礎教育における統合看護学実習は、卒業後スムーズに実践現場に適応できるような環境で、知識と技術を統合できるような内容で、チーム医療の必要性の理解とともに、複数患者を受け持ち、チーム員として学生自身がタイムマネジメントをできる基礎的な能力を養うように位置づけられている（小山，2012）。A大学においては4年次に実施され、既習の概念や理論などの基礎的知識、技術を統合し、より質の高い実践的な看護実践能力を養うことを目的に実施される。学生は【実習に由来する困難】において、【他職種連携】や【マネジメント概念の理解】に困難を感じていた。学生は、今までの実習では持っていなかった一個人としての看護師としての働きだけでなく、病院とい

う組織の中の医療をチームとして捉えた視点を持つことが出来たと考える。さらに、[2人受け持ち・多重課題]や[優先順位]も問題であったと捉えており、初めて複数患者を受け持ち、[患者が実在しない]中で看護を考察することにも困難を感じていた。これらのサブカテゴリーは実習目標とも関連していることから、学生には統合看護学実習のねらいとした学びを得ようとする中で困難を感じていたと推察される。

厚生労働省(2019)は本実習の位置づけである看護の統合と実践において、チーム医療の一層の推進が重要であることから、多職種連携について学び、臨床判断を行うための基礎的能力を養うことが重要であると述べている。また統合看護学実習に関して、各専門領域での実習を踏まえ実務に即した複数の患者を受け持つ実習、一勤務帯を通した実習等を行うことが留意点であると述べており、これらは本実習のねらいとなる部分である。学生は【実習に対する克服方法】として[タイムマネジメント]や[優先順位を考える]といったことを挙げており、厚生労働省が示した留意すべき点に対し、臨地実習ではない中でも、できる限り実務に近い形で考察していたと推察される。また、身体面だけでなく視野を広げて[全体像を捉える]という方法をとっており、今までの領域実習において学んだ知識を統合させ、受け持ち患者を捉えようとしていた。そのために、紙面上患者であっても[実践するように意識する]、[予想する]などの方法をとっており、学生は臨地実習ではない初めての形の中でも今までの知識や経験をもとに、積極的に学びを得ようとしていたと考えられる。しかし、夜勤帯への申し送りの見学など、一勤務帯に留意した内容は本実習では行われず、コードとしても抽出されていなかった。従来の臨地実習であれば日勤帯から夜勤帯への看護師の申し送りの見学や参加をするが、学内であったことや実際の現場との連携がなかったこともあり実施されなかった。このような24時間途切れることなく看護するための看護師同士の連携の実際を学ぶことについては、今後の課題として残った。

コロナ禍における実習の運営については、DVDなどの視聴覚機材の使用や、カンファレンス時などにオンラインで医療機関の臨床指導者に参加してもらうなど、各教育機関によって様々な対応がとられ、多様化している。本学とほぼ同時期に行われていた統合看護学実習において太田ら(2021)はGoogle classroom上で音声課題をオンデマンドで使用し、対面では教員がDVD等を用いながら直接指導する形式をとってい

た。これらを通し、学生について、看護技術やコミュニケーション等の臨床経験不足は否めず、将来の不安が見られているとしている。本学においても、オンラインツールを用いたことによって紙面上患者が用いられた。そのため、学生は[患者が実在しない]という困難から、実際に患者を観察したり援助を行うことができないため、情報から患者を想像し、経過を推測しなければならなかった。そのため、[想像できない]という困難が起こっていたことが考えられる。さらに、それに伴って必要な援助に関する正確な判断ができず、[自分の考えが優先される]という困難が生じていた。また、実在しない患者に起こりうる状況を想像する力には、経験や学力などが影響するため、学生間で差が生じやすく【学生の資質に由来する困難】が生じたと考えられる。本実習では、出来る限り臨床現場に近い実習になるように、患者の情報を実習日毎に更新していき、学生はその情報を基にその日の行動計画を決定し、看護過程を追加修正していった。それに伴い、状況に合わせて計画等の[修正をすぐ行う]、対象への[情報提供]を考えることや、記録が[書けない]などの困難が生じたと推察される。このように、【学生の資質に由来する困難】に関しては、多くの学生の学習に関するコードから構成されているといえる。【学習に対する克服方法】としては、学生は[先生からの指導を活かす]ことや、[講義を活かす]ことを行っていた。鈴木ら(2019)は、実習では、学生の反応や変化を認識した指導側の助言や示唆による関わりが双方向に影響しあい進むなかで、学生の学ぶ意欲が向上すると述べている。本実習において、教員は学生の登校日以外でも、つねにmanabaやzoomなどオンラインツールを通して相談できる状態であった。また、グループ毎に教員を配置しており、看護技術や考察に関して細かな指導を受けることができた。これらの関わりによって教員と学生の関係性を作り、共に実習を進めていくことが克服方法として学生の認識に繋がったと考えられる。

さらに、従来であれば2週間の実習であるところ、週2日間を4週間としており、学生は記録や考察の時間を多くとることができた。[実習期間延長を活かす]ことや、[インターネット]などをオンラインツールと併用しながら実習に臨むといった、本実習ならではの取り組みも学生の目標達成へ向けた克服方法となったと考えられる。玉木(2017)によると、現代の若者は、思考や想像あるいは創造する機会が少なく、特性として「意欲・積極性・主体性の低下」、「おとなし

さ」,「マイペース」,「不器用」を挙げている。コミュニケーションに関しても SNS が主流となる現代では、IT 化によるコミュニケーション力の低下が課題とされる中で、本実習ではインターネットをはじめとしたオンラインツールを使用していた。さらに、通常であれば2週間である実習期間が4週間となったことで、患者について考える時間を長くとることができた。インターネットという学生にとって馴染みのあるツールを使用し、通常の実習より時間をかけ、学生が自分のペースで熟考できたことは、現代の若者の特性に合った学び方になっていたと考えられる。

しかし、本実習は A 大学看護学科において初めてのコロナ禍での実習の運営であり、開催までの準備期間も短いものであった。他の教育機関では、臨床の看護師を講師としてオンラインで講義を行ったり、カンファレンスに参加して頂くなど、臨床現場との連携を強化しているところもある。また、実際に病棟の様子や看護師の動きを動画で撮影したものを教材として用いているところなどもあり、臨地実習ではない中でも臨床ならではの学びを取り入れようとした取り組みが多数行われている。本実習において、達成すべき目標につながるように学生は学ぶことができたが、現場で働く医療従事者に指導を受け、変化し続ける状況に身を置き、緊張感の中で知識を統合し多重課題を考えるとといった経験は学内では得難い。学生自身が新人看護師として働くことを見据えた社会性の修得や、看護師の連携方法についての学習など様々な面で、臨床現場の実際を取り入れた教育の導入の必要性が示唆された。

VII. 本研究の限界と今後の課題

本研究は単発のレポート分析であり、一度提出したものを再度提出させるという回収方法であったことから限られた人数となったため、一般化には限界がある。今後はさらにデータを蓄積することや、オンラインツールの使用方法をはじめとした実習の運営方法について検討することが課題である。

VIII. 結 論

本学におけるオンラインでの統合看護実習の学生の困難として、【実習に由来する困難】と【学生の資質

に由来する困難】の2つのカテゴリーが明らかとなった。内容はハイブリッド型に由来する困難より、統合看護学実習に由来するものが多く見られた。さらに、その克服方法として【実習に対する克服方法】と【学習に対する克服方法】の2つのカテゴリーが明らかとなった。達成すべき目標につながるよう学生は学ぶことができたが、自身が新人看護師として働くことを見据えた社会性の修得や、看護師の連携方法についての学習などの様々な面で、臨床現場の実際を取り入れた教育の導入の必要性が示唆された。

付 記

本研究は、24th East Asian Forum of Nursing Scholars Conference にて一部を発表した。

利益相反

本研究に関して、開示すべき利益相反はない。

文 献

- 1) 厚生労働省. 看護学教育モデル・コア・カリキュラム 学士過程においてコアとなる看護実践能力の修得を目指した学修目標. 2019 [閲覧日 2020-7-2]. URL : https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf
- 2) 厚生労働省. 新型コロナウイルス感染症対策の基本的対処方針. 2020 [検索日 2020-7-2]. URL : <https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/000633501.pdf>
- 3) 小山真理子. 今、改めて看護基礎教育カリキュラムの統合実習を考える. 看護展望 2012 ; 37(2) : 94-102.
- 4) 文部科学省. 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師等養成所における臨地実習の取扱い等について. 2020 [検索日 2020-7-2]. URL : https://www.mext.go.jp/content/20200624-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf
- 5) 太田晴美, 大崎真, 早坂笑子. 新型コロナウイルス禍の学内統合看護実習評価 —— 学生アンケート結果から ——. 東北文化学園大学看護学科紀要 2021 ; 10(1) : 27-42.
- 6) 鈴木由紀子, 佐藤直美. 看護学実習における指導者・教員との相互作用で学生の学びの意欲が高まる様相. 日本看護医療学会雑誌 2019 ; 21(2) : 1-12.
- 7) 玉木敦子. 今どきの看護学生をどう育てるか. 神戸女子大学看護学部紀要 2017 ; 2 : 1-10.